

インターネット上に見られる慣用的表現の誤用に関する調査

望月 源 (東京外国語大学外国語学部 講師)

1 はじめに

インターネットの普及は我々の生活に多くの変化をもたらしているが、そのひとつに以前では考えられなかったほど容易に個人による情報発信が可能になったことがあげられる。個人がインターネット上に自分のホームページを持つことが珍しくなくなって久しくたつ。最近では、Web 日記や Blog (Weblog、ブログ) などと呼ばれる個人で管理できる日記のような感覚で使える表現メディアが登場したこともあり、身近なできごとから国際情勢に至るまで多岐にわたる話題について意見が述べられていることも多い。おそらく、現代の日本では、かつてないほど多くの一般の人々が「読者」を意識した文章を日常的に書いたり読んだりしていると言って良い状況にある。

文章を書くことは、相手を目の前にした会話とは異なる難しさがある。会話では、発話者はさほど先まで計画して発話するわけではなく、聞き手にしても一時的な記憶に限界があるため、細かく注意して聞くと一貫しない面が多々生じていてもそれほど問題にはならないことが多い。しかし、文章の場合は、活字として固定され、時間をかけて読まれることになるので、読み手も会話のときほど寛大には対応してくれない。記述の論理性、一貫性が強く求められる上に、伝えるための表現の工夫も必要であり、自分の伝えたいことがらを適切に表わすことは意外に難しい。

文章において、ある状況や考え方などを効率良く表す方法として、慣用句や慣用的な言い回しの使用がある。慣用句とは「二語以上が結合し、その全体が特別の意味を表す句」(広辞苑)であり、読み手との共通理解の成り立つ道具として用いられる。慣用的表現は、短く簡潔に書き手の意図を伝えることが可能になるので、適切に用いれば便利で効果的である。また、特別な言い回しを行うことで文章に知的な印象を付加する効果もある。そのため、個人の Web ページ上でも、慣用句や慣用的な言い回し(以下まとめて「慣用的表現」と呼ぶ)が用いられる場合も多いが、同時に慣用的表現の「誤用」を目にする機会も増加した。文字として記され、テキストデータとして残ることにより、会話では聞き逃されることの多かった誤用や、おかしい表現というものが認識されるようになった。こうした影響もあってか、最近、日本語そのものに対する関心も高まっており、日本語の慣用的表現の使い方や誤用に関する書籍も多く出版されている(国広、1991; 国広、1995; 北原、2004; 柴田、2004)。

本稿では、インターネット上に見られる、こうした慣用的表現の誤用に関する調査を行なう。ただし、本稿の目的は、どのような記述が「誤用」で、何が正しい「正用」であるか、という慣用的表現の使い方に関する報告ではなく、誤用はなぜ起こるのか、どのような原因で人が誤用するのかを考察することという点に焦点をあてる。そのため、実際に見られる慣用的表現の誤用例をリストアップし、その誤りの個所と、誤りに共通してみられる性質を分類した上で分析し、どのような性質の誤用が、どのような理由で起こるのかについて考察する。

2 誤用例の収集と分類

調査の手続きは次のとおりである。まず、2005年度の調査（望月・中島、2005）と同様に、慣用的表現の誤用に関する書籍やインターネット上のページを参考に調査対象となる慣用的表現とその誤用のリストを収集する。次に、正用と誤用の差を調べ、誤用部分の品詞などから収集したリストを分類する。次に、正用と誤用の相違個所に見られる音や意味の類似性などから誤りの性質を分類する。それぞれの分類に対する分布を示した上で、3節で個別に考察を行なう。

2.1 誤用の収集

慣用的表現の誤用としては、少なくとも次の2つを考えることができる。

- 文字レベルでの間違いはないが、慣用的表現の意味を間違えている誤用。
これは、慣用的表現の意味を間違えて使用したため誤用となる。
例えば、気づかいしなくてよいという意味の「気が置けない」を、気を許せない、油断できないとの意味で使用した場合などが該当する。
- 慣用的表現の意味は間違っていないが、文字レベルでの間違いのある誤用。
これは、用法や場面は間違っていないが、文字レベルでの間違いのある誤用であり、正用と誤用の間に表層的な相違が存在する。

前者のタイプの誤用は、文字上は正しく記されているため、誤用か正用かは、表層からは判断できない。記述内容を読んだ上で文脈によって誤用されているか否かを判断しなければならない。そのため、インターネット上に存在するこのタイプの誤用を発見することは難しい。一方、後者のタイプの誤用は、仮に書き手によって表された文字列を慣用的表現だと仮定した場合に、少なくとも文字レベルでの誤りがあると考えることができる。そのため、インターネット上から文字を頼りにして、慣用的表現の誤りである「可能性のある」記述を探し出すことは前者よりも容易に行える。そのため、本調査では前者のタイプの誤用は扱わず、後者のタイプの誤用だけを対象とすることとした。もちろん、後者のタイプの誤用であっても、慣用的表現を誤用したわけではなく、表現されたとおりの文章である場合も含まれるため、誤りの候補に関しては実際に誤りであるかどうかを確認する必要があ

る。

なお、漢字の読み間違いをしているという誤用も可能性はあるが、文字レベルではふりがなが振られていない限りそれがどのように読まれているかを判断することができないので今回は考慮の対象から外した。本研究では、後者のタイプの誤用を対象とし、ある慣用的表現（正用）の一部分が変形したことによって誤った表現になっているものに焦点をあてる。

2.1.1 収集方法

今回の調査の収集対象は、2005年に行った文献（望月・中島、2005）の方法を基本とし、さらに詳細な調査を行うこととした。具体的には以下の手続きで対象となる慣用的表現を決定した。

1. インターネット上の慣用的表現を取り扱った Web ページや、日本語の誤用をテーマにした文献（国広、1991；国広、1995；北原、2004；柴田、2004）を参考にし、このような間違い表現の正誤ペアを 378 組リストアップした。
2. リストアップされた 378 組の中で、あまり一般的でないと思われるものを除いて 190 組に絞った。これを一次収集の対象とした。
3. 一次収集の対象となった 190 組について、誤用、正用両方に存在する漢字の送り仮名のバリエーションを加えて、一組中の別表記を追加した。例えば、正用「引導を渡す」、誤用「印籠を渡す」について、「渡す」が平仮名の場合も考えられるので、正用「引導をわたす」、誤用「印籠をわたす」をそれぞれ加え、表記のバリエーションを増やした。
4. 一次収集の対象となった 190 組の正用、誤用表現について、GoogleAPIs (GoogleAPI, 2004) を用いてインターネット上で検索した。GoogleAPI とは、インターネット上で WWW ページの検索サービスを提供している Google の検索をプログラムによって行うための、API (Application Programming Interface) であり、Google に利用者登録を行うことで、自作したプログラム内で www.google.com を利用した検索を行うことができる。今回は慣用的表現を入力としてその検索ヒット件数を出力とするようなプログラムを自作し、この GoogleAPI を用いて、指定した表現を含む WWW ページの数を取得した。
5. 検索を行うと、実例がそれほど数が多い場合もあるため、GoogleAPI を使った検索結果から、次の条件のいずれかに合うものだけを詳細な二次収集の対象とした。
 - ▶ 正用と誤用の検索結果の合計が 500 件を超えている。
ただし、誤用が 10 件以上で 0.1%(1000 件に 1 件の割合)以上を占めているもの。
 - ▶ 誤用の方が、正用の件数を上まわっている。
ただし、誤用が 10 件以上あるもの。
 - ▶ 上記の基準に満たない場合でも、興味深い事例と判断されるもの。この結果、よく利用されている慣用的表現、誤用の割合が多い慣用的表現、特徴的な慣用的表現のいずれかの特徴をもつもの、122 組を二次収集の対象とした。

6. 二次収集の対象 122 組について以下の詳細な収集調査を行った。

Google (www.google.co.jp) を用いた検索を改めて手作業で行い正用と誤用について次のチェックを行う。

➤ 正用のチェック

正用として得られた結果から手続き 3 の各表記ごとに上位 50 位を上限とし、検索結果として示されたリンクをクリックしてウェブページの内容を調べることで「実際に正しく慣用的表現が用いられているかどうか」を調査する。

➤ 誤用のチェック

誤用として得られた結果から手続き 3 の各表記ごとに上位 50 位を上限とし、検索結果として示されたリンクをクリックしてウェブページの内容を調べることで「実際に慣用的表現の誤用として認められるかどうか」を調査する。

一次収集で得られる検索結果では、単純な検索ヒット数までであり、実際にページ上で慣用的表現が「誤用」されているのか、誤用ではなく文字面どおりに用いられているだけであるのかがわからない。そのためこの手続きでは手作業により内容を確認する。ただし検索ヒット数が大量であると実際にすべてを調べるのは困難であるため、今回は上限を 50 ページまでとした。この収集調査の結果、以下の基準をすべて満たすものだけを最終的な考察対象とする。

➤ 誤用の事例数が実際に 10 以上ある

➤ 正用が実際に正用である割合が、調査した分の 50%以上である

➤ 誤用が実際に誤用である割合が、調査した分の 10%以上である

上記の条件にあてはまる正用・誤用の組み合わせは、118 組だった。データを抜粋した例を図 1 に示す。なお、手続き 4 で行った GoogleAPI を用いた検索プログラムでは、API の仕様により、検索先が www.google.com となるようであるが、インターネットエクスプローラのような Web ブラウザを用いた検索では、日本語による検索式の検索対象としては、www.google.co.jp が用いられる。そのため、二次収集の対象を決める際の手続き 4 での自動検索プログラムによる検索結果と、本手続き 6 で手作業で個別に www.google.co.jp を使って行った検索結果では、内容が異なることがある。

図 1 Google を用いた誤用検索の例

			調査数(MAX50)	誤用数	その他
★★★★名詞型★★★★ N					
番号	正誤	表現	GoogleAPI		
N001G00	正	意に介さず	2530	50	0
N001G01	正	意にかいさず	30	41	0
N001B00	誤	気に介さず	10	16	14
N001B01	誤	意にかいさず	1	2	2
GoogleAPI	合計=2571	正=2560 誤=11 (0.004297)	全(0.004278)	A (A)	
手作業調査	正用数=91 (内, 正用 91, 率 1.000000)	誤用数=18 (内, 誤用 16, 率 0.888889)			
N002G00	正	人の噂も七十五日	602	50	0
N002G01	正	人の噂も75日	948	50	0
N002B00	誤	人の噂も四十五日	20	17	15
N002B01	誤	人の噂も45日	566	38	35
GoogleAPI	合計=2136	正=1550 誤=586 (0.378065)	全(0.274345)	A (A)	
手作業調査	正用数=100 (内, 正用 100, 率 1.000000)	誤用数=55 (内, 誤用 50, 率 0.909091)			
N003G00	正	十把一からげ	993	50	0
N003G01	正	十把ひとからげ	988	50	0
N003B00	誤	一把一からげ	55	42	38
N003B01	誤	一把ひとからげ	98	50	41
GoogleAPI	合計=2134	正=1981 誤=153 (0.077234)	全(0.071696)	A (A)	
手作業調査	正用数=100 (内, 正用 100, 率 1.000000)	誤用数=92 (内, 誤用 79, 率 0.858696)			
N012G00	正	引導を渡す	1660	50	0
N012G01	正	引導をわたす	148	50	0
N012B00	誤	印籠を渡す	148	50	29
N012B01	誤	印籠をわたす	3	10	6
GoogleAPI	合計=1959	正=1808 誤=151 (0.083518)	全(0.077080)	A (A)	
手作業調査	正用数=100 (内, 正用 100, 率 1.000000)	誤用数=60 (内, 誤用 35, 率 0.583333)			

2.2 誤りの個所による分類

118組の正用と誤用で表記を比較し、異なり部分の品詞等の違いにより以下の4つのグループを設定した。

- 名詞型：

正用中の名詞が誤用では別の名詞に置き換えられているもの。
格などに関係なく、名詞の置き換えであればこの型に分類した。例：
正用「首を傾げる」(GoogleAPIで20780件、正用率100/100=100%)
誤用「頭を傾げる」(GoogleAPIで805件、誤用率88/100=88%)。
118組中58組がこのタイプに分類された。

- 述語型：

正用中の述語が誤用では別の述語に置き換えられているもの。
述語部分の誤りであっても、同一語の活用などの違いによる間違いは含まない。例：

正用「熱に浮かされる」(GoogleAPI で 645 件、正用率 $100/100=100\%$)
誤用「熱にうなされる」(GoogleAPI で 539 件、誤用率 $41/50=82\%$)。
118 組中 43 組がこのタイプに分類された。

- 助詞型：

正用中の助詞が誤用では別の助詞に置き換えられているもの。例：
正用「恩に着せる」(GoogleAPI で 543 件、正用率 $100/100=100\%$)
誤用「恩を着せる」(GoogleAPI で 754 件、誤用率 $97/100=97\%$)。
118 組中 8 組がこのタイプに分類された。

- 活用型：

正用と同じ述語が誤用でも用いられているが、述語の活用部分や態などが変化して
いたり、肯定・否定が反転しているなどするもの。例：
正用「住めば都」(GoogleAPI で 6663 件、正用率 $150/150=100\%$)
誤用「住まば都」(GoogleAPI で 52 件、誤用率 $11/13=85\%$)。
118 組中 8 組がこのタイプに分類された。

121 組のリストを付録 A に示す。

2.3 誤りの性質による分類

2.2 節で分類した 4 つのグループごとに、各事例の誤り部分を調べ、その性質の違いによる分類を行なった。

2.3.1 名詞型に対する誤りの分類

名詞型 58 組の正用と誤用の相違個所に見られる誤りの性質を次のように分類する。ただし、各分類は排他的でなく重複して分類される場合もある。

- 発音が類似しているもの：

正用と誤用で異なる単語の音が類似している場合、ここに分類する。例：
正用「引導を渡す」(GoogleAPI で 1808 件、正用率 $100/100=100\%$)
誤用「印籠を渡す」(GoogleAPI で 151 件、誤用率 $35/60=58\%$)。
58 組中 16 組がこの誤りに分類された。

- 意味が類似しているもの：

正用と誤用で異なる単語が、同義語とあって良い関係にある場合、意味が類似して
いるとして、ここに分類する。例：
正用「面の皮が厚い」(GoogleAPI で 831、正用率 $87/87=100\%$)
誤用「顔の皮が厚い」(GoogleAPI で 52、誤用率 $37/51=73\%$)。
58 組中 8 組がこの誤りに分類された。

▶ ほぼ同じで修辭的な違い：6 例

▶ 同義語：2 例

- 語の雰囲気が似ているもの：

正用と誤用で異なる単語の漢字の一部が同じであったり、部分的に音が類似するなどし、辞書的な関連がないものの、何となく雰囲気が似ていたり、関連性が連想可能な場合に、ここに分類する。例：

正用「薄紙をはぐように」(GoogleAPI で 187、正用率 48/50=96%)

誤用「薄皮をはぐように」(GoogleAPI で 265、誤用率 47/50=94%)。

58 組中 42 組がこの誤りに分類された。

▶ 数字：4 例

▶ 意味的に類似、連想可能：24 例

▶ 全体部分関係：7 例

▶ 反対：3 例

▶ その他：4 例

- 意味的整合性が合わないもの：

誤用の名詞と文法的に共起する(係り受け関係にある)語が、意味的に適切でない語である場合、ここに分類する。多くの場合、雰囲気が似ているものや意味が類似しているものと重複する。例：

正用「枝もたわわに」(GoogleAPI で 575、正用率 50/50=100%)

誤用「実もたわわに」(GoogleAPI で 160、誤用率 39/59=78%)¹。

58 組中 14 組がこの誤りに分類された。

2.3.2 述語型に対する誤りの分類

述語型 43 組の正用と誤用の相違個所に見られる誤りの性質を次のように分類する。ただし、各分類は排他的でなく重複して分類される場合もある。

- 発音が類似しているもの：

名詞型の場合と同じく、正用と誤用で異なる単語の音が類似している場合、ここに分類する。例：

正用「人道に悖(もと)る」(GoogleAPI で 490、正用率 100/100=100%)

誤用「人道に劣(おと)る」(GoogleAPI で 22、誤用率 37/43=86%)。

43 組中 5 組がこの誤りに分類された。

- 意味が類似しているもの：

正用と誤用で述語をほぼ同じ意味で用いていると判断できる場合、ここに分類する。

¹ たわわは(枝が)「たわむ」様子であり、実はたわまない。

例：

正用「体調を崩す」(GoogleAPI で 13189、正用率 100/100=100%)

誤用「体調を壊す」(GoogleAPI で 1486、誤用率 95/100=95%)。

43 組中 19 組がこの誤りに分類された。

- ▶ 意味の不適合：10 例
- ▶ 一般化：5 例
- ▶ 修飾語、派生語の有無：4 例

- 語の雰囲気似ているもの：

正用と誤用で、辞書的な関連ははっきりとしないものの、何となく雰囲気や意味が似ていたり、意味的に関連しないが連想可能な場合に、ここに分類する。例：

正用「脚光を浴びる」(GoogleAPI で 23420、正用率 100/100=100%)

誤用「脚光を集める」(GoogleAPP で 258、誤用率 50/52=96%)。

43 組中 12 組がこの誤りに分類された。

- ▶ 意味的に類似、連想可能：11
- ▶ 反対：1

- 意味的整合性が合わないもの：

誤用の述語と文法的に共起する(係り受け関係にある)語が、意味的に適切でない語である場合、ここに分類する。例：

正用「合いの手を入れる」(GoogleAPI で 1329、正用率 194/194=100%)

誤用「合いの手を打つ」(GoogleAPI で 255、誤用率 102/111=92%)。

43 組中 22 組がこの誤りに分類された。

2.3.3 助詞型に対する誤りの分類

助詞型 8 組に見られる誤りを次のように分類する。

- 単一の助詞を誤ったもの：

ある名詞に対する助詞を間違えたため意味が通じなくなった場合にこの誤りに分類する。例：

正用「手に負えない」(GoogleAPI で 18110、正用率 100/100=100%)

誤用「手が負えない」(GoogleAPI で 302、誤用率 97/100=97%)。

11 組中 4 組がこの誤りに分類された。

- 複数の助詞を入れ違えたもの：

複数の助詞を間違え、述語に対する格関係が正用とまったく異なる場合にこの誤りに分類する。例：

正用「百聞は一見に如かず」(GoogleAPI で 24531、正用率 108/108=100%)

誤用「一见は百聞に如かず」(GoogleAPI で 595、誤用率 88/92=96%)。

11 組中 4 組がこの誤りに分類された。

2.3.4 活用型に対する誤りの分類

活用型 8 組に見られる誤りを次のように分類する。

- 述語の活用を誤ったもの：

活用が間違っている場合にここに分類する。例：

正用「伏し目がち」(GoogleAPI で 2307、正用率 116/116=100%)

誤用「伏せ目がち」(GoogleAPI で 772、誤用率 149/150=99%)。

8 組中 3 組がこの誤りに分類された。

今回の事例では、活用の形として許されないものが 5 組、文語の間違いが 2 組、連体形と連用形の間違いが 1 組あった。

- 肯定・否定が逆転したもの：

例：

正用「うだつが上がらない」(GoogleAPI で 857、正用率 50/50=100%)

誤用「うだつが上がる」(GoogleAPI で 169、誤用率 49/50=98%)。

8 組中 3 組がこの誤りに分類された。

- 態が変わっているもの：

例：

正用「顰蹙(ひんしゆく)を買う」(GoogleAPI で 3707、正用率 150/150=100%)

誤用「顰蹙を買われる」(GoogleAPI で 37、誤用率 29/32=91%)。

8 組中 2 組がこの誤りに分類された。

3 誤りの原因に関する考察

前節で分類した誤りの個所と性質の分布をまとめたものを、名詞型と述語型については、表 1 に示す。助詞型と活用型については、表 2 に示す。

表 1 名詞型、述語型の誤り分布

誤りの性質	名詞型	述語型
事例数	58	43
発音の類似	16	5
意味の類似	8	19
雰囲気の類似	42	14
意味的整合性の誤り	14	23
合計 (述べ数)	80	61

表 2 助詞型、活用型の誤り分布

誤りの性質	助詞型	活用型
単一の助詞誤り	4	—
複数の助詞誤り	4	—
活用誤り	—	3
肯定・否定誤り	—	3
態の変化	—	2
合計	8	8

表 1 では、名詞型と述語型の誤りの性質に重複があるため、事例数よりも合計が多い。名詞型および述語型の誤りの性質の重複に関する詳細を表 3 に示す。

表 3 名詞型、述語型の誤りの組み合わせ

発音	意味	雰囲気	整合性	名詞型	述語型				
○	—	—	—	8	2				
○	○	—	—	0	0				
○	○	—	○	0	0				
○	—	○	—	8	0				
○	—	○	○	0	0				
○	—	—	○	0	3				
—	○	—	—	8	10				
—	○	—	○	0	9				
—	—	○	—	20	8				
—	—	○	○	14	6				
—	—	—	○	0	5				
名	述	名	述	名	述	名	述	名・計	述・計
16	5	8	19	42	14	14	23	58	43

以降は今回収集した事例の中で数の多かった名詞型 58 組および述語型 43 組の合計 101 組に関して共通の「発音の類似」、「意味の類似」、「雰囲気の類似」および「意味的整合性の誤り」の 4 点に焦点をあてて考察を行なう。

3.1 発音の類似について

ここでは、発音が類似している 21 組（名詞型 16 例、述語型 5 例）について、詳しく調べ、どのような場合に発音の類似による誤用が起こりうるのか考察する。

21 組の音素列を調べたところ、違いが子音 1 つのものが 8 組（名詞型 5 例、述語型 3 例）、

母音 1 つのものが 8 組 (名詞型 6 例、述語型 2 例)、1 音節 (1 文字、1 モーラ) のものが 4 組 (名詞型のみ)、1 音節と子音 1 つのものが 1 組 (名詞型のみ) であった。内訳をに示す²。

表 4 発音の類似における相違点

子音 1 つが異なる (8 例)		名詞型	述語型
母音が i	i と ki, zi と i	3	0
母音が a	ka と na, ha と ta	0	2
母音が o	do と ro, mo と bo, mo と o	2	1
母音 1 つが異なる (8 例)			
子音が b	ba と bu	1	0
子音が t	ta と te	0	1
子音なし	i と e	0	1
子音が s	syu と si	2	0
長音の有無	フリとフリ _二 (ri と rii)、メ _二 とメ (mee と me)	2	0
促音の有無	カ _イ サイとカ _ッ サイ (kai _{sai} と kassai)	1	0
1 音節が異なる (4 例)			
1 音節少ない	シ _チ (ti) とシ _〇	1	0
1 音節多い	ホロ _〇 ロとホロ _ホ ロ (ro)	1	0
異なる音節	ネ _ボ ケとネ _ム ケ (bo と mu)、 シ _ン メイとテ _ン メイ (si と te)	2	0
1 音節と子音が 1 つ異なる (1 例)			
	シャ _ク シとシャ _モ ジ (kusi と mozi)	1	0
合計		16	5

21 組中の 16 組は子音か母音が 1 つだけ異なるものであり、一番多かった。対比のため、発音の類似が見られなかった他の慣用的表現の中で、音素列の相違が 1 音節以内であるものを調べたところ 14 組あった。今回の調査データ内では、14 組すべてが、母音と子音が両方とも異なっていた。この点から、音だけに限って考えると、相違が 1 音節以内でさらに、母音か子音のどちらか 1 つだけが異なる場合には、発音が類似していることによる言い間違い、あるいは勘違いが起り誤用と結びつく可能性がある。その他の 1 音節以上が異なる場合についてみると、1 音節だけ異なっているが音の類似が感じられない 14 組と条件的にはほぼ同じであることから、相違する音素の数だけで類似性の有無が感じられるとは考えにくい。相違する音素だけでなく、その周辺の語とのまとまった音の連続で類似性の有無の感じ方が変化したり、形態素をまとまりとした意味的な要因が作用して類似性が感じられることの方が要因として大きい可能性がある。この点については今後さらに調査する

² 使用する音素は (小泉、2003) を参考にアルファベットで表記した。

必要がある。なお、相違する音素については、正用か誤用のどちらかに母音の i が関係するものが 11 組あり、最も多かった。

また、発音の類似のみのものは 21 組中の 10 組であり、半数は音だけでなく他の要因も重なっている。そのため、発音の類似した語の存在だけが誤用の原因というわけではなく、正用の語との間に、音を含めた複合的な類似点を持つ語が誤用される可能性も高い。

3.2 意味の類似について

意味の類似に関しては、表 3 に示したように、名詞型においては全体 8 組のすべてが他の要因との関連がなかった。一方述語型においては、全体 19 組の内、他の要因との関連がなかったものが 10 組、意味的整合性の誤りとの重複があるものが 9 組であった。つまり、名詞型においては、今回のデータでは「慣用的表現としては正確でないので誤用ではあるが、慣用的表現から離れた文自体の意味としては、それほど違和感のない事例」であったといえる。例えば、「顔の皮が厚い」（正用「面」）や「歯をむく」（「牙」）などは、ニュアンスが変わるものの理解できなくもない。述語型においては、名詞型と同じく「慣用的表現としては不正確だが意味は通じる」というものが約半数あり、残りの約半数は、「語の意味は同じ様なものではあるが、慣用的表現にある他の語との意味的整合性を考えると、そのような語の組み合わせは存在しない」という誤用であった。例えば、「体調を壊す（正用「崩す」）」や「偶然落ち合った（正用「会った」）」など、相違する語どうしは直接的には意味的な類似性があるものの、他の語との組み合わせでは意味的に整合性がとれないと判断される。

総じて、このタイプの誤りは、慣用的表現の全体的な意味は比較的正確に記憶しているが、個別の語については曖昧であるため、意味がほぼ同じで正用とは異なる語を選択することにより起こると考えられる。

3.3 雰囲気の類似について

雰囲気の類似に関しては、表 3 に示したように、名詞型においては、全体 42 組に対して、他の要因との関連が見られないものが 20 組であった。また、発音の類似と重複するものが 8 組、意味的整合性の誤りと重複するものが 14 組あった。述語型においては、全体 14 組に対して、他の要因との関連が見られないものが 8 組で、意味的整合性の誤りと重複するものが 6 組であった。雰囲気の種類をさらに細かく分析すると、「数字に関係するもの」「意味的に類似しており、連想が可能であるもの」「反対語になっているもの」「全体部分関係と言えるもの」「その他」にわけて考えられる。詳細な内訳を、表 5 に示す。

表 5 雰囲気の類似の内訳

	名詞型	述語型
雰囲気の類似	42	14
数字に関係	4	0
意味的に類似、連想可能	24	13
反対語	3	1
全体部分関係	7	0
その他	4	0

他の要因との関連がみられないものについては、「中らずといえども遠からず」といった誤用が比較的多い。例えば、「池の中の蛙」（正用は「井」）は、池を水のたまっている狭い場所と考えれば理解できなくもない。また、「思いも付かない事態」（「寄らない」）は、「思いが浮ぶ」か「思いが及ぶ」かの違いに目をつぶれば理解できなくもない。

発音の類似と重複する名詞型のみ 8 組は、数字に関係するもの 2 組、意味的に類似、連想可能なものが 6 組であった。例えば、「一把一からげ」（正用「十把」）や「先見の目」（正用は「明」）などがあげられる。この場合は、数はそれほど多くはないものの、正用と誤用とで発音が類似している上に、語の持つ印象としても類似しているためになんとなく使用し、誤用したと考えられる。

また、意味的整合性の誤りと重複するものもあわせて 20 組と比較的多い。この場合は、慣用的表現から離れた文自体の意味として考えても、違和感のある事例ということになる。この点については次の 3.4 節でまとめて考察する。

3.4 意味的整合性の誤りについて

意味的整合性の合わない誤り 37 組に関しては、表 3 に示したように、名詞型の場合は、すべて雰囲気の類似との重複で 14 例であった。述語型の場合は、意味的整合性だけのものが 5 例、雰囲気の類似と重複するものが 6 例、意味の類似との重複が 9 例、発音の類似との重複が 3 例だった。意味的整合性の合わない誤りは、係り受け関係や格関係にある名詞と述語の間の意味的關係が適切でない場合が該当する。そのため、そもそも意味の通じない文を作成していることになる。これは、一般的な文章では、通常、書き手が犯しにくい誤りであると考えられるが、慣用的表現においては、101 組中名詞型 14 組、述語型 23 組の計 37 組で、4 割近く発生していることになる。このような誤用は、そもそも慣用的表現を普段から使い慣れていないことに遠因があると思われるが、直接的な原因としては、次の推測ができる。

- 「単語」を意識せずに、慣用的表現内の部分文字列と一致する語を用いてしまう。
例えば、「合いの手を入れる」という正用が「合いの手を打つ」と誤用される場合を考えると、本来「合いの手」で 1 単語とすべきところを「手」だけを考えたため、「手

を打つ」の「打つ」という述語を共起させた誤用であると思われる。また、「女手一つで」を「女手一人で」という誤用は、「女の手」として「女手」をまとめて考えなければならないところを、「女」という語だけを考えたため、「女一人」となり、「一人」という述語を共起させた誤用であると考えられる。

- 語の意味、由来を理解せずに、慣用的表現内の部分文字列と共起させてしまう。
例えば、「火蓋を切る」を「火蓋を落とす」とする誤用において、「火蓋」は、火縄銃の火薬と火縄の間にある安全装置のようなフタで、開く（「切る」は開く、外すの意味）ことにより機能するので、落ちるものではない。しかし、「蓋」だけを考えた結果「火蓋を落とす」と誤用したと思われる。また、「先鞭をつける」という慣用的表現は、人より先に（馬に鞭打って）物事に手をつけることであり、既に鞭打っているのだが、「鞭」だけに共起した結果「先鞭を打つ」（「つける」）と誤用する。
- 似たような行動、事象を連想させる雰囲気の良い語を選択してしまう。
例えば、「コーヒーをいれる」という表現を「コーヒーをたてる」とする誤用は、同じ様な液体であり飲み物である茶の場合に「茶をたてる」ということから起きる誤用であると思われる。また、「将棋を指す」を「将棋を打つ」とする誤用は、「碁を打つ」からの連想だと推測される。「眉をひそめる」を「目をひそめる」とする誤用は、その時の動作を思い浮かべ描写する際に、眉でなく目を選択してしまったものと考えられる。

3.5 考察のまとめ

以上述べてきた、誤用につながる書き手の行動や誤用の持つ特徴を次のようにまとめられる。

- 発音が類似するために起きたと感ぜられる誤用における音素上の相違は、せいぜい1子音か1母音の相違までである。
- 発音の類似だけでなく、誤用される語と正用の語との意味が同じか、語の間に何らかの関連が感ぜられる語が用いられるとき誤用になりやすい。
- 慣用的表現で用いられる「単語」の本来の意味や、由来を理解せず、印象だけで語を選んで使用することによる誤用をしやすい。
- 慣用的表現内の「単語」の切り出しを誤って、正確でない部分文字列との関係で語を用いる誤用をしやすい。
- 語や複合語の表す本来の意味を理解して使用するという正確さを重視せず、曖昧な記憶に基づいた印象で語を適当に用いる誤用をしやすい。

4 おわりに

本稿では、慣用的表現の誤用について調査を行なった。慣用的表現は決まり文句であるので、使用の際に辞書等で調べることができる。そのため、本来、表記誤りによる誤用

はせずすむはずである。それにも関わらず、現実には誤用が相当数存在する。こうした誤りは書き手の不注意ではあるが、人間の言語活動としてはよく見られ、人間らしい誤りであるとも言える。

今後の言語処理にとって、人間の誤りを補う能力は重要な要素技術の1つである。慣用的表現の誤りは、「明らかな正解の存在する誤り」であるので、頑健な言語処理システム構築に向けた誤り訂正研究の最初の題材として好ましい。また、誤用を正しく理解して正用に結びつけるには、少なくとも本稿で述べたような誤用の原因を考慮した推論が不可欠であり、技術的にも挑戦するだけの価値や難しさがある。

参考文献

- 小泉保 2003, 音声学入門, 大学書林
- googleAPI 2004, Google Web APIs (Beta), Web document,
<http://www.google.com/apis/index.html>, 2004
- 国広哲弥 1991, 日本語誤用・慣用小辞典, 講談社
- 国広哲弥 1995, 日本語誤用・慣用小辞典「続」, 講談社
- 北原保雄 編 2004, 問題な日本語, 大修館書店
- 柴田武 2004, 人前で使える日本語, 祥伝社
- 望月源・中島一樹 2005: 「インターネットにおける日本語慣用表現を中心とした誤用の調査」, 言語処理学会第11回年次大会

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金萌芽研究（課題番号 1565002）の補助を受けた。

付録

A.

表の意味：「音」＝発音の類似、「意」＝意味の類似、「雰」＝雰囲気の類似、「数」＝数に
 関係する、「イ」＝意味的に関連が連想可能、「全」＝全体部分関係、「反」＝反対語、「他」
 ＝その他、「整」＝意味的整合性の不一致

名詞型

NO	正用	誤用	音	意	雰	整
N001	意に介さず	気に介さず	○			
N002	人の噂も七十五日	人の噂も四十五日	○		数	
N003	十把一からげ	一把一からげ	○		数	
N012	引導を渡す	印籠を渡す	○			
N013	乳母日傘	おんぶ日傘	○			
N014	快哉を叫ぶ	喝采を叫ぶ	○		イ	
N017	趣向を凝らす	嗜好を凝らす	○		イ	
N018	触手を伸ばす	食指を伸ばす	○		イ	
N019	振りの客	フリーの客	○			
N020	先見の明	先見の目	○			
N021	縁は異なるもの	縁は奇なもの	○		イ	
N022	木漏れ日	こぼれ日	○		イ	
N023	首を傾げる	頭を傾げる			全	
N024	耳に留める	頭に留める			全	
N025	親譲り	兄譲り			イ	
N030	蛙の面に水	蛙の顔に水		○		
N031	面の皮が厚い	顔の皮が厚い		○		
N032	どの面下げて	どの顔下げて		○		
N033	風上にも置けない	風下にも置けない			反	
N034	胸を撫で下ろす	肩を撫で下ろす			全	
N035	頭を丸めて	髪を丸めて			全	×
N038	紅一点	黒一点			反	
N040	三十にして立つ	四十にして立つ			数	
N043	俎板の鯉	俎板の鯛			イ	
N045	生唾を飲み込む	唾を飲み込む		○		
N046	牙をむく	歯をむく		○		
N048	女手一つで	女手一人で			イ	×
N050	枝もたわわに	実もたわわに			全	×

N051	腸が煮えくり返る	胸が煮えくり返る			全	×
N053	眉を顰める	目を顰める			全	×
N054	三つ巴の争い	四つ巴の争い			ス	
N055	レッテルを貼られる	ラベルを貼られる		○		
N057	けんもほろろに	けんもほろほろに	○			
N058	井の中の蛙	池の中の蛙			イ	
N059	寝ぼけ眼	眠気眼	○		イ	
N064	舞台裏	裏舞台			他	
N071	見掛け倒し	見掛け倒れ			反	
N074	天地神明に誓って	天地天命に誓って	○			
N075	足を掬われる	足元をすくわれる			イ	×
N077	顔色をうかがう	顔をうかがう			イ	×
N080	弓を引く	弓矢を引く			イ	×
N081	弱音を吐く	弱気を吐く			イ	×
N082	薄紙をはぐように	薄皮をはぐように			イ	
N085	猫も杓子も	猫もしゃもじも	○			
N087	期待外れ	期待倒れ			イ	
N089	横槍を入れる	横車を入れる			他	
N092	一世一代の大仕事	一生一代の大仕事			イ	
N094	内幕	裏幕			イ	
N095	押しが強い	押し出しが強い			イ	×
N096	御役御免になる	御役目御免になる		○		
N099	今昔の感	昔日の感			イ	
N100	世事に疎い	世故に疎い		○		
N101	贈与を受ける	贈答を受ける			イ	×
N102	人影が疎ら	人並みが疎ら			他	×
N103	病軀を押して	病魔を押して			イ	×
N104	符節を合わせたよう	符丁を合わせたよう			イ	
N105	目端が利く	目鼻が利く			他	
N108	論陣を張る	論戦を張る			イ	×

述語型

NO	正用	誤用	音	意	雰	整
P001	熱に浮かされる	熱にうなされる	○			×
P002	的を射る	的を得る	○			×
P003	人道に悖る	人道に劣る	○			
P004	恨み骨髓に徹した	恨み骨髓に達した	○			
P005	怒り心頭に発して	怒り心頭に達して	○			×
P009	口をつぐむ	口をつむる		○		×
P010	上には上がある	上には上がいる		○		
P011	偶然会った	偶然落ち合った		○		×
P012	耳を傾ける	耳を傾げる		○		×
P013	苦虫をかみつぶたような顔	苦虫をかんだような顔		○		
P014	体調を崩す	体調を壊す		○		×
P016	道草を食う	道草を食べる		○		
P017	兜を脱ぐ	兜を取る		○		
P018	一石を投じた	一石を投げた		○		
P019	櫛の歯が欠けたよう	櫛の歯が抜けたよう			イ	×
P023	馬脚を現す	馬脚を出す		○		
P024	好評を博した	好評を取った		○		
P025	追い抜く	追い抜かず			反	
P026	目から鱗が落ちる	目から鱗が取れる		○		
P029	脚光を浴びる	脚光を集める			イ	
P031	心血を注ぐ	心血を傾ける		○		×
P032	嫌気が差す	嫌気がする		○		
P033	耳に胼胝ができる	耳に胼胝が付く		○		×
P034	二の句が継げない	二の句が出ない		○		
P035	明るみに出る	明るみになる		○		×
P036	汚名を雪ぐ	汚名を晴らす			イ	×
P038	物議を醸す	物議を呼ぶ			イ	
P043	先鞭をつける	先鞭を打つ				×
P044	火蓋を切る	火蓋を落とす				×
P046	予防線を張る	予防線を引く			イ	×
P048	思いも寄らない事態	思いも付かない事態			イ	
P052	叩けよさらば開かれん	求めよさらば開かれん			イ	
P053	一泡吹かせる	一泡食わせる			反	×

P054	照準を合わせる	照準を当てる			イ	
P056	鯖を読む	鯖を言う				×
P057	将棋を指す	将棋を打つ		○		×
P058	香を聞く	香を嗅ぐ			イ	
P060	コーヒーを入れる	コーヒーを立てる		○		×
P061	合いの手を入れる	合いの手を打つ				×
P062	食指が動く	食指をそそる				×
P063	追いつ追われつ	追いつ抜かれつ			イ	
P065	陣頭指揮を執る	陣頭指揮を振るう			イ	×
PN72	汚名を返上する	汚名を挽回する			イ	×

活用型

番号	正用	誤用	種類
K003	伏し目がち	伏せ目がち	活用
K004	住めば都	住まば都	活用
K005	意図せずして	意図せざるして	活用
K009	間尺に合わない	間尺に合う	肯否
K010	うだつが上がらない	うだつが上がる	肯否
K011	寸暇を惜しんで	寸暇を惜しまず	肯否
K015	数える程	数えられる程	態、助動詞
K017	颯感を買う	颯感を買われる	態、助動詞

助詞型

番号	正用	誤用	種類
J002	手に負えない	手が負えない	単一助詞
J003	上を下への大騒ぎ	上へ下への大騒ぎ	単一助詞
J004	思い半ばに過ぎる	思い半ばを過ぎる	単一助詞
J005	恩に着せる	恩を着せる	単一助詞
JN63	百聞は一見に如かず	一見は百聞に如かず	複数助詞
JN67	木に竹を接ぐ	竹に木を接ぐ	複数助詞
JN69	刀折れ矢尽きる	矢折れ刀尽きる	複数助詞
JN70	類は友を呼ぶ	友は類を呼ぶ	複数助詞